

## 四分律行事鈔における涅槃經の受容

大 澤 伸 雄

### はじめに

三蔵の伝説と研究とを進めながら、仏教の統合化の課題にたち至った隋唐仏教界において、実践道の上から仏陀の教誡の始終を明らかにしようとした一人が、四分律行事鈔を著した道宣（五九六―六六七）である。彼は、本来仏陀はその自内証から唯一の戒律を説示したのであるが、それを受けとる側の能力や素養や時機がそれぞれ異なるために、いろいろな律蔵を中心としながら経や論においても承け伝えられ、それらによって複雑な系譜をたどり今日に至っているのだ、統一性に欠けた恣意的な行道観が氾濫していると考えた。そこで四分律を基本にしたながらも、真の戒律を探求し、一大律蔵を集成しようとしたのである。

今日の仏教学上の常識と同じく初唐の長安仏教界にお

いても、四分律はインドの法蔵部所伝の律蔵であり、いわば小乗仏教の戒律であると理解されていた（大正四〇・二六〇）。ところが道宣はこの四分律を中軸にしなが、仏陀直説の唯一の律蔵を明らかにしたいというのであるから、それには前もって多くの論証が求められてくる。

すなわちそのためにはまず戒律の集大成としての律や律論、いわゆる四律五論の中で、四分律が如何に優れているかを明らかにしなければならなかった。とりわけ十誦律と四分律の系譜が二分していた教界において、四分律と十誦律の優劣に焦点をあてて、道宣は次の四点で判釈して四分律の優れていることを論拠づけている（大正四〇・一七）。今それを要約してみると、①十誦は四分に比較して戒本の文が明瞭でないところがある。②戒体として、十誦は色法としてその業本をきわめないが、四分は非色非心として心法に従って修道することになるので

大乘に通じる。③十誦は五戒や八齋戒の分受はゆるさな  
いが、四分は一分受でもゆるすから俗を摂取できる。④  
十誦は四分に比べて作法に規準となるものがない。以上  
の点を理由にして、道宣は四分律の方が仏陀の真意に近  
いとして、優位性を主張するのである。

次に大乘義についての配慮が当然求められるが、これ  
に対して道宣は四分律分通大乘義を提示するのである。

この主張は四分律隨機磨疏(正統蔵一・六四・四三三a)に  
みられるもので、道宣の四分律理解の独自性を示すもの  
であるので要約してみると、①四分律の序で弟子のこと  
を「仏子」(以下⑤まで四分律の相当箇所を示すと、大正二二  
・五六八a)と呼んでいること。②僧殘法第八の無根謗  
戒の解釈において、沓婆比丘が阿羅漢を得ても無為に住  
することなく、知事をつとめた記述があること(同、大正  
二二・五八七a)。③四分律の戒本の終偈に、これまでに  
説く所の功德は、「施二切衆生二皆共成二仏道二」(同、大  
正二二・一〇二三a)とあること。④四分律の序に「不<sub>レ</sub>

憂財物云々」(同、大正二二・五六七c)とあること。⑤  
「塵境は根境に非ず」(未詳)とあること。この点につい  
て、元照は済縁記(正統蔵一・六四・四三三a)で四分律の  
この文は大乘唯識觀の識についての領解に通ずるもので

あると理解している。道宣は以上の点をあげて、「若し  
自身の為に仏道を欲求することあらば、当に正戒を尊重  
すべし、及び衆生に廻施して、共に仏道を成ずべし」  
(大正四〇・二六b)という大乘の精神が四分律にみられる  
とし、大乘に展開し、大乘を包含していくとする。これ  
はいわゆる分通大乘義といわれるもので、四分律宗にお  
いても道宣独自の立場である。その道宣は四分律を大乘  
律とすることはかつて慧光律師(四六八―五三七)も主張  
したと述べている(大正四〇・二六b)。これら道宣の主張  
は菩薩地持經・瑜伽論系統の三聚戒説において、攝律儀  
戒には律藏の戒本が位置づけられて、菩薩戒思想の体系  
の中に意味づけられていることや勝鬘經に「毘尼は即ち  
大乘の学なり」(大正十二・二九b)とあること、また律  
藏を大乘家が重視する中国仏教での考え方は、竺仏念、  
鳩摩羅什をはじめとする訳經僧などによって早くから意  
識されてきたことなどが、道宣の思想的根拠になってい  
ることは明らかである。

次いで道宣は四分律に依りながら、積極的に大乘仏教  
の本旨を宣揚し、具現しなければならない。そのために  
は、律藏の全体を大乘仏教の教学の上で再点検して見る  
必要がある。つまり仏説といわれるものを通観し、開会

して一仏乗の戒律を明確にしなければ、教界の誰もが納得して評価しないし教団の統一や清浄性の確保はできないからである。こうした道宣の課題に答え、そこに導く經典として注目されてくるのが大乘涅槃經である。

すなわち、涅槃經の戒律に関する所説の要点は、本性清浄菩薩戒、すなわち仏性戒が掲揚されていることである。とりわけ道宣が涅槃經を重視したのは、一つには涅槃經は仏陀觀の展開によって、仏の制戒の奥にある真意義を、十句義(十利)という定型化した制戒理由ばかりでなしに、大乘の教理の高みにおいて開顯しようとしており、その内容は自己の修養ということだけでなく衆生愛護、正法護持という大乘菩薩精神を持戒ということによって強調していること。また二つには涅槃經は独自の菩薩戒本を説かず、あくまでも小乗の戒本を基本としながら、その形式化、消極化を徹底して批判しつつ、大乘戒としての積極性、弾力性、厳格性を菩薩道の本質ということにおいて裏づけていることである。つまり戒学における事(具体性)と理(普遍性)、性(本来具えている先天的性質)と修(修行によって得られる後天的性質)ということからすれば、四分律は事と修には優れているが、極教としての涅槃經によって理や性の問題が補われることによって、事

理、性修などを止揚した視点から判釈されなければ、眞の律藏の開示とはならないと考えたからである。

涅槃經は仏が入滅時に臨んで成仏以来の経戒をもって滅後の指針とすべきを遺誡され、全体の説相は戒律についての諸問題が多く取り上げられている。しかしその經全体の主旨は、「如来常住無有變易」ということと、「一切衆生悉有仏性」ということに帰着し、このことを實踐課題の上で説示することにある。つまり衆生の具体的な修道生活においては、法身常住なる故のはたらきとしての悉有仏性の悲願に、衆生は如何に応答していくのかということである。衆生は仏の本質に信順し、法を知悉すべきであるが、それも持戒の事相をたよりとしてこそ開顯できるとするのが涅槃經の戒律觀といってもよい。悉有仏性が安易に受けとられては、仏身常住の意味はなくなってしまうから、そこで仏教の修道をもう一度本来の教に立ちかえて、普遍性と具体性を回復しようとするのである。涅槃經のこれら菩薩戒独自の理念とその立場を宣揚する伝統は、北地の涅槃學の特色であるといわれる<sup>①</sup>。このことは四分律宗にも影響しその実践的性格は長安で学んだ道宣にまで深く継承されてきていると思われる。また涅槃經の正法護持の強調は、道宣の自覺した

末法<sup>②</sup>の危機感の上で、益々欠くべからざることとなったと考えられる。

そこで四分律行事鈔における涅槃經の位置づけを今少し具体的に考察を加えてみたい。この作業に入るためには既に行事鈔の引用典籍検索の業績が川口高風氏によって示されている。<sup>③</sup>今はそれに裨益されながら検討してみたいと思う。ちなみに川口氏の行事鈔における経蔵の引用回数表を上位からあげてみると、阿含經81、涅槃經61、大方等大集經23、十輪經14、華嚴經10、賢愚經7、大宝積經6などで、引用回数の上からみて、涅槃經は大乗經典の中で特に注目されていると考えられる。そしてその他主要な大乘經典については、般若經0、法華經0、維摩經1<sup>④</sup>という結果である。阿含については、律の主張を法の観点で補うために依用される。また大集經・十輪經については末法觀と破戒の様相についての経証として用いられることが多い。華嚴經については一仏乘、自性清淨心などを背景とした戒律思想を受用する。しかし前述の如く、戒律そのものを根底から見直しつつ具体化への示唆をわすれない涅槃經の比重とは自ずから異なると思われるが詳細は別の機会としたい。これら引用回数はあくまでもひとつの目安にすぎぬので、以下において行事

鈔における涅槃經の受容の特徴と性格につき具体的な検討を加えてみたい。その場合に次の二点に整理して考察をすることにしたい。すなわち、戒律の概念についてと、八不淨物受蓄についてである。それは、まずこの二点についての引用が多いことと、また戒と律を仏性思想の上で普遍的に位置づけることと、具体的な実践的課題において財物の受蓄をどうとらえていくのかということとは性と修、理と事のような二つの概念に相当するものであり、相互に緊迫した課題でもあるが、また相依相即することでもあるから、行事鈔と涅槃經の関係を探る上で、一度は視角を定めて検討しなければならない範疇であると思うからである。

行事鈔で道宣は戒と律に関する所説を広く三藏から蒐集し、教理的な考察を加えて、戒・律とは何かということの論証を種々に試みているが、これらの思索の過程において涅槃經が如何に受容されているか、またその役割を考証してみたいと思う。

(なお涅槃經については北本の四十巻本で註記を加えていくことにする。)

行事鈔の総序的な部分であり、戒律の仏教上の正しい意味と三宝住持に不可欠なことを表明する標宗顯徳篇において、道宣は、戒法・戒体・戒行・戒相という四種の宗要を論じている。その中で戒行を定義づけて、

三言<sub>レ</sub>戒行<sub>二</sub>者、既受<sub>レ</sub>得此戒乘<sub>レ</sub>之在<sub>レ</sub>心。必須<sub>下</sub>廣修<sub>二</sub>方便<sub>一</sub>、檢<sub>二</sub>察身口威儀之行<sub>一</sub>、克<sub>レ</sub>志專崇高慕<sub>二</sub>前聖<sub>一</sub>。持<sub>レ</sub>心後起、義順<sub>二</sub>於前一名為<sub>二</sub>戒行<sub>一</sub>。故經云、雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>觸對<sub>一</sub>、善修<sub>二</sub>方便<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>清淨<sub>一</sub>。文成驗矣。(大正四〇・四c)

というのであるが、この「故經云」以下は、涅槃經梵行品(大正十二・四七〇b)の六念処の念戒を説くところである。つまり「菩薩思惟す『戒有りて破らず、漏さず、壊せず、雑えず。形色無しと雖も、護持すべし、触對無しと雖も、善く方便を修し、具足を得べく、過咎有ること無し、是れ大方等大涅槃の因なり』と」というものである。

ここに戒行というのは、受戒の後に戒体のはたらきとして自然に起ってくる善き行為をいうのであるが、戒とは固定的・実体的なものではなく、規範の形式に拘泥せ

ずに仏の制戒の精神を受けとる心にある。しかし制戒の本旨をたずねるならば、制旨の方便である威儀をてだてとしていくべきであり、その遵守にこそ衆生が清淨性を獲得できる道があるとする。しかるに戒行そのものも形式的・固定的なものを否定していく行であり、戒とはもと形・色など無きものであるが、それだからこそ方便化導の善巧としての慈悲行と受けとめてだてとすべきであるという。道宣がここで依用した梵行品に一貫して説かれることは、菩薩は自己の修道は進んで、それが他者に対する慈悲行の実践へ進むことである。従ってここで説かれる戒そのものも、仏の出世が衆生を化益することにあつたという真意義に開眼し、その応答として受持すべきものであり、念戒の意趣を道宣は「形色」「觸對」なきものであるが、大乘菩薩の自利の必然的展開としての利他行として終始念持すべきことと理解するのである。なおこの念戒の所説は行事鈔において他にも二度引用されている。

また先と同じく標宗顯徳篇において、三宝を久住せしめるためには戒に随順していくことが必要であることを論証するために、經論二藏に示される定慧の法門である化教と律藏に示される戒学の法門である制教といわれる

彼の二教判をもつて考察が加えられるが、機に随つて衆生を化益する化教の大乗經の經証のひとつとして、華嚴經、大集經などと並んで涅槃經梵行品（大正十二・四六七c）が採用されて結びとしている。すなわち、

涅槃云。欲見<sub>レ</sub>仏性<sub>ニ</sub>証<sub>ニ</sub>大涅槃<sub>ハ</sub>、必須<sub>ニ</sub>深心修<sub>ニ</sub>持淨戒<sub>一</sub>。若持<sub>ニ</sub>是經<sub>ニ</sub>而毀<sub>ニ</sub>淨戒<sub>一</sub>、是魔眷屬非我弟子<sub>一</sub>。我亦不聽<sub>ニ</sub>受<sub>ニ</sub>持<sub>ニ</sub>是經<sub>一</sub>。（大正四〇・五a）

というものである。涅槃經は三宝不離一体を基調とするが、聖・梵・天・嬰兒・病行の五行があれば三宝は滅することがないという。この五行は涅槃經が提起した菩薩行の本質であると考えられるが、しかしこの經を受持していても犯戒することがあれば法滅となるという。つまりここでいわれる梵行とは、如来常住ということを経らんとし、自己の仏性を見出さんとする者は、仏性を自己の具体的な生活の上で領解開顯するものでなくてはならない。すなわち衆生の仏性は煩惱のために汚染されているので三学によってそれを淨化・修治することで仏果に至ることが出来る。この煩惱を断つためには個々において止惡作善が必要であり、その要が戒律である。それなぬの大乗の下では戒律には拘泥する必要はなく、無持無犯であつて、善もなく罪もないなどという魔説を伝え、

惡をなしている徒があるという。これに對して涅槃經は「悉有仏性」とはあくまでも如来のはたらきであり、衆生はどこまでも自己を省察して持戒すべきであるということであるが、またこのことは、行事鈔全体に一貫していることでもある。そもそも戒律とは声聞の法であり、大乘では捨てるべきであるという説を詳しく分析し、これに對して具體的な自己のありさまを内省して反論しているが、戒体を遵守して、不犯を心がけることを示す篇聚名報篇では、大小二乗の理はもともと分隔したものではない。しかし、それぞれの機に對して藥を設けて病を除くことを優先するから、伝えられてきている教えにはそれぞれに深淺がある。また教法の悟解は人それぞれ心の深淺すなわち境界によるものであり、教旨にあるのではないとする（大正四〇・四九c）。そして、世尊の制戒の深意を受け取る者の心を重視する。その心とは、能憶・能持・能防の三用をもって、身口の威儀を遵守していく主体であるという。たとえ制戒は外面的で他律的な規制ではあつても、その深意は慈濟の願いそのものであり、それこそ佛法が身にそなわつていく道であると理解すべきであるという。だから、律藏において、波羅夷罪から突吉羅罪に至る罪の強弱・輕重を論ずることも、制意が

らすれば矛盾したことであり、突吉羅罪といっても輕視すべきではなく、五篇七聚の様に罪障の輕重を伝承してきたのは諸律師のうちの誰かが歴史の途上で妄作したものであるとまでいう。

道宣においては、戒相は仏陀一代の教化を考えれば無量であり、ある特定の戒本だけに固執することは誤まりであること、またそれを受持しようとする衆生の機根は有限でありとても仏意とは同じではない。だから人間の認識しうる対象世界において、人間の心を汚すことを規制する戒の本意からすれば、無量の戒相のあること、また罪の輕重を論ずることは、そもそもその制旨に反するといふのである。そして、突吉羅罪についての果報を論ずるが、それにつき涅槃經如来性品(大正十二・四〇五a)を依用して、

涅槃經中、犯<sub>二</sub>突吉羅罪<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>忉利天日月歲數<sub>一</sub>、八百萬歲墮<sub>二</sub>地獄中<sub>一</sub>。(大正四〇・四九a)

と強調し、また化教の愚を明らかにするために、同じく先の如来性品の引用に次ぐ經文を依用して、

涅槃又云。若言<sub>下</sub>如来說<sub>二</sub>突吉羅<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>上歲數入<sub>二</sub>地獄<sub>一</sub>者、並是如来方便怖<sub>レ</sub>人。如<sub>レ</sub>是說者、當<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>決定是魔經律<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>仏所說<sub>一</sub>。(大正四〇・四九a)

獄者、並是如来方便怖<sub>レ</sub>人。如<sub>レ</sub>是說者、當<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>決定是魔經律<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>仏所說<sub>一</sub>。(大正四〇・四九a)

定是魔經律、非<sub>二</sub>仏所說<sub>一</sub>。(大正四〇・四九a)

と述べる。たとえ輕罪でも忉利天の日月歲數の八百萬歲という長い間地獄に墮ちつづけるという如来の教えを、これは方便であつて、衆生を怖れさせるために説かれたのであると理解することがあれば、それは魔の經律であり、仏説ではないと強く主張するところである。如来性品のこの經文は、仏性は護戒においてこそ見証できると銘記したことで古来から注目されてきたところである。

つまり一切衆生に本具している如来性、仏性を衆生において具象的にどう展開することができかねるかを問ひとしたものである。これにつき道宣は、如来ははるか昔に、未來にはこの様な主張をする者が輩出するであらうことをすでに見抜いて、あらかじめ説示されたものであり、そして邪正を定めて機先を制せられたものであるとしている。また同じく篇聚名報篇では、律儀戒と菩薩戒は声聞乘と菩薩乘に対応して、それぞれ異なり、優劣があるとする考え方を批判するが、それには涅槃經聖行品(大正十二・四三二b)を依用して、

初心大士、同<sub>二</sub>声聞律儀<sub>一</sub>、護<sub>レ</sub>譏嫌戒<sub>一</sub>性重無<sub>レ</sub>別。即涅槃經中、羅刹乞<sub>二</sub>微塵浮囊<sub>一</sub>菩薩不<sub>レ</sub>与、譬<sub>レ</sub>護<sub>二</sub>突吉羅戒<sub>一</sub>也。(大正四〇・四九c)

という。この聖行品における聖行とは涅槃經を聞信して

出家受戒して、四聖諦を觀じて如法に修行することであるが、ここでは初心の出家菩薩は律儀戒の突吉羅罪に至るまで護持すべきを、羅刹の譬をもって説く。<sup>⑦</sup>大乘の教えは理の上で大きく展開しているが、修道の具体相においては、声聞律儀戒を受持することの必要性を説き、そうしていけば根本業清淨戒などの五支を具足することになるというのである。つまり息世譏嫌戒(世戒)と性重戒(性戒)という菩薩戒のこの二つの基本理念と、律儀戒は何も相違するものではないことを論拠づけるのである。

さて次いで具体的な戒条を詳説し判釈していく随戒釈相篇において、はじめの戒体を論ずるところで、五戒・八戒・十戒・具足戒の別解脱律儀戒を説く理由を述べるのであるが、仏教に入信する者は、はじめは漠然として理解できないので、たとい限られたものであっても具体的な三帰五戒からはじめるとする。三帰五戒そのものは限界のあるものであってもまずそれを正しく受けとめていくことによってこそ、得戒や持犯についての考えをめぐらすことができて修道を深めていくことができるのである。それでは律儀戒は幾種あるかといえば、戒体を論じ境について考えれば無量ということになる。戒とは本来惡を防ぐものであるから、惡縁がある限り戒もそれに

相應してあるべきで、衆生無量ならば戒もまた無量であるというべきである。今こうした觀點に立つて戒体を分析して考えてみると、作(教)無作(無教)の二種で考えてみることができるが、この点についての論考に涅槃經迦葉品(大正十二・五七五c)を依用して、

涅槃云。戒有三種。一者作戒、二者無作戒。是人唯具<sub>レ</sub>作戒不<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>無作<sub>一</sub>、是故名爲<sub>二</sub>戒不具足<sub>一</sub>。即如上論、以<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>淳重之心<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>奉行<sub>一</sub>、意不<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>戒也。(大正四〇・五二a)

と述べる。ここでは作・無作の両戒を具えてこそ眞の戒具足だと論じられるが、特に道宣においては無相・無著という、本所受戒として本性清淨にささえられた無作戒を發得するためには、信の基盤の上に聖戒に対する淳重心が必要であると強調する。そしてこれを通して受想行識の四心、善惡無記の三性を超えたところで具足することがなければ、一切の惡を斷つことのできる無量の戒を具えることはできないとする。そしてこの心は如何に微小の戒であっても遵守するという訓練から具わってくるものであるというのである。道宣の戒体論構成の基盤的役割をこの涅槃經が果していることが知られる。

また同じく随戒釈相篇では先にも述べた世間戒と性戒



の問題が、菩薩戒の本質を探求する上で考察されるが、ここでも涅槃經聖行品（大正十一・四三三a）の見解が示される。すなわち、

又涅槃第十一卷下文云。菩薩持<sub>二</sub>息世譏嫌戒<sub>一</sub>与<sub>二</sub>性重<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>別。広有<sub>二</sub>明文<sub>一</sub>。息世戒者、即白四羯磨所<sub>レ</sub>得、諸文如<sub>レ</sub>彼恒須<sub>二</sub>細讀<sub>一</sub>。（大正四〇・七一b）

とある。ここでは息世譏嫌戒と性重戒との差別優劣はないという。聖行品では息世譏嫌戒について三十四項目にわたり説かれていたが、護法を現実の宗教界の在り方、またそれを取り巻く諸相の中で実現していくことと、空性を中心として具体的な持戒を重視することを強調するのである。戒律とは時代地域によって限定された性格をもつものであるが、その制意の奥にある仏の真意すなわち正法を明らかにして受けとるべきであるというのである。また菩薩思想の実践的な内容はたとえば初地といつても、現実的には非常に高い心境であるから、そのはるかな階梯に至り得ぬ者は破戒の可能性を具備しているから、護罪法をまず手だてとして進修していくべきであるというのが道宣の考え方である。これらは五・十・具足・菩薩戒を重層的に受戒していく中国仏教の戒観を意義づけることの論拠である<sup>⑧</sup>。

これまでに於いて、道宣は自らの戒の理念の形成のために涅槃經から次の点を受容しているといえる。すなわち、仏陀制戒の精神をどこまでも探究し、本性清淨菩薩戒を明らかにしていくことで、小乗戒に対する觀念を打破し、大乘の講学における戒律輕視の思潮を批判して、一仏乗戒を主張すること、また翻って衆生の現実の修道においては、律儀戒をはじめ護持禁戒においてこそ仏性は見証できるということを、道宣は涅槃經から受けとろうとしている。これら戒の本質についての所説は、大乘經典の中でも涅槃經しか果しえない戒観の主張であり、道宣が広く仏教思想全体の中から、戒律の眞の精神を明らかにしようとして行事鈔を撰述していくためには不可欠のものであった。涅槃經の戒観によって行事鈔の戒の本質を明らかにすることに、大きな思想的幅と奥行きが加えられたのである。また教界において涅槃經の重きを考えれば行事鈔が益々説得力をもつことになったといえる。

## 二

先にみた戒律の概念についての諸考察が、それでは具体的な事相の判釈の上でどうなっていくのか、また涅槃經は行事鈔の中でこの点に関してどう位置づけられている

くのかということ、八不淨物受蓄の問題を通して・修の観点から考察してみようと思う。

大乘において戒を考える場合、在家出家共に三毒の内の貪欲の問題はきわめて微妙な様相をもつことになる。例えば在家において菩薩行を修するには慈悲行としての布施、とりわけ財施を実行するためには、蓄財は肯定されるし積極的な意義をもつ。しかし出家の形態をとって菩薩行を修するとなると財貨の備蓄はゆるされないにしてもその誘惑も多くなり、その取り扱いには複雑な点も多い。ここ涅槃經においても四十巻の中で二十数箇所にわたり不淨物受蓄が説かれるが、そのあたりの教界の複雑な事情を反映していると考えられる。ここで道宣の言う八不淨物受蓄とは、出家比丘菩薩が蓄えてはならない八種のもので、田宅園林、種植生種、貯積穀帛、畜養人僕、養繫禽獸、錢宝貴物、氈褥金鏤、象金飾牀及び諸重物をいう。ちなみに涅槃經には八種の名称を順次あげたところは見られず、また定型化していないが、これは曇延や慧遠ら中国の涅槃經研究者が聖行品の經説(大正十二・四三二a以下)を八種にまとめて定型化した説を重視し参照して、四分律宗の伝統の上で道宣が踏襲して項目だてたとみられている<sup>⑧</sup>。

まずこの八不淨財については標宗顯德篇において、戒法に違反する者が多ければ法滅を招くことを明らかにするための具体的な例に涅槃經をあげている。すなわち、涅槃中、由三諸比丘不持戒故畜三不淨財、言三是仏聽。如何此人舌不三卷縮、広如三彼説。(大正四〇・六a)

というものである。涅槃經のこの相当部分と思われる文は、

若有説言三如来聽レ畜三奴婢僕使如レ是之物三舌則卷縮。(大正十二・三九一b)

とある如来性品の文と思われるが、ここでは奴婢・僕使などを不淨物と理解し、これらの受蓄を堅く誠しめ、これが法滅につながるというのであるが、これらは涅槃經と共に行事鈔の基本的な把握の仕方である。

次に随戒積相篇では蓄錢宝戒について、道宣の八不淨財についての子細な検討がみられる。他の捨墮法と比較して多くの字数を費しているし、この中で涅槃經の財物受蓄の經説を多く引用しているのである。そこでまず四分律戒本の捨墮法すなわち三十尼薩耆波逸提法第十八の戒条の本文をあげてみると、「若し比丘、自手にて金銀、若しは錢を取り、若しは人に教えて取り、若しは口に受

くべしとする者は、尼薩耆波逸提なり」(大正三・一〇一七c)というものである。この金・銀・銭の意味するものを道宣は八不淨物(財)と拡大して理解するのである。受け取り方は自手捉・教人捉・置地受の三種であり、戒文の意味からは、貪心捉宝または受錢法であり、必ずしも「蓄える」という意味はない。しかし、これについても四分律宗の相伝であることや、涅槃經で「蓄える」が強調されている経意をうけて、蓄錢宝に転化して受けとることを選んだのではないかと思われる。

そこで道宣はこの戒についての仏陀制戒の因由を次の三点にまとめている。第一は誹謗を息めんがため、第二は鬪諍を減せんがため、第三は聖種節檢して貪りを止めんがためであるとしている。また八不淨財については、あくまでも出家者に限定して考えるべきであり、古来より「沙門四患」すなわち婬・酒・邪命・錢宝の中の錢宝にふくまれるという。この八種の財物によって、「皆貪りを長じ、道を壞し、梵行を汚染して、穢果を得ることあるが故に、不淨と名づくるなり」(大正四〇・六九c)という。そして蓄財の開許については、大乘の經典は機教ともに急であり、小乗はともに緩であるから、大乘では蓄財は理に反するから重罪を科し、小乗では事に違反する

から輕罪とするのだと会通する。そして大機はこの制戒に堪えることができるが、小機(小乗)はそれに堪えることができないので蓄財を開許するのだと理解している。また統いて八財のそれぞれの具体的な開遮を検討していくので、ここでは今それぞれを要約しながら、その開遮の事相の中で、實際の戒の運用の上で涅槃經がどのように道宣に受容されるのかをみることにしたい。

①田宅・園林については、個人的には一人分の小房の受蓄はゆるされる。また僧伽の四方僧物として一切衆生のために用いるものであれば僧伽が受蓄してよいとする。

②種植生種については、僧伽のためであれば受蓄できるが、個人としてはゆるされぬ。

③貯積穀帛については、昔から三十六石まではゆるすという説が善生經にあると主張されてきているので、善生經を検討してみたがその様な記述はないという。そこでこの制旨を経論にたずねてみると、それは涅槃經如來性品(大正十二・四〇三b)にみられるとして、経意を要約して取りあげている。すなわち、

涅槃云。声聞僧者無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>積聚<sub>一</sub>。所謂奴婢僕使庫藏穀米塩豉胡麻大小諸豆、若自手作<sub>レ</sub>食自磨自舂、種種非法故。若有<sub>二</sub>說言<sub>三</sub>如來聽<sub>レ</sub>畜<sub>二</sub>非法物<sub>一</sub>、舌則卷縮。

というものである。これによって律蔵を正しく伝持する声聞においては、穀物や種や布などの受蓄を開許しないとしている。しかし、誦經、坐禪などの遊行のための道路糧として受蓄するのは、その分量と期間を限ってゆるされるが、淨人に説淨することを義務づけることとする。

④蓄諸僮僕については、個人と僧伽について複雑にからみあうが、僧伽でも奴・使人・園民婦を受蓄できないが、しかし、死ぬまで三帰五戒を受持する人（淨人）であれば僧伽は受けることができる。ただし、比丘僧伽は男子、比丘尼僧伽は女子の淨人でなければならないとする。道宣は時の教界の諸伽藍では女人を蓄え、奴婢を売買しているが、姪のみならず盜をも犯すことになると警告している。そして、十誦律の無福の十施をあげて、「女人」を出家者（男子）に施す者は福德にならぬとしている。ちなみに無福の十施をあげてみると、女人、戯具、画<sub>二</sub>男女合像<sub>一</sub>、酒、非法語、器仗大刀、惡藥、惡牛、教<sub>レ</sub>他作<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是施<sub>一</sub>であるという。

⑤蓄畜生については、一切の野鳥獸は受蓄すべきではない。しかし比丘が受けることを拒否するとその鳥獸が

殺されてしまう場合には守護すべきであるという。そして野鳥獸の売買が聖教に違反し、能施者も罪をかさねることになることを涅槃經（所在不明）の説としてあげ、また常住僧物として田宅園林車馬奴婢などを受けるには五人以上で構成される僧伽でなくてはならぬこと、また牛馬に乗るのは老・病の比丘に限ることをあげる。

⑥畜錢宝については、元来より自らの貪心で蓄えようとする場合はゆるされない。しかし病氣の時など藥を買う場合はゆるされるが、淨人が扱うべきであり、僧伽への施与の場合でも淨人の扱いに限り、個人のための受蓄はゆるさないとする。

⑦氍毹釜鏝については、刻鏤の大牀は金宝でなければよいし、氍毹も限られた大きさのものならばよいし、生活の諸雜器も鉄・銅・陶器ならば個人の受蓄もよいとする。

⑧像金飾牀および諸重物については、米の他は一切の穀物を蓄えてはならないから、米以外の容器は不用であり、また器仗が施された場合は、これが殺人の具とならぬよう僧伽で壊わすべきであり、また樂器が施された場合は淨人に依頼して処分すべきであり、金宝などの施物は施主に返還すべきであるという。

これまで道宣の八不淨物についての理解を要約してきてきたが、受蓄の開遮についてのまとめとして、また開遮判釈の規準の基本精神を掲げるために、涅槃經如来性品（大正十二・四〇二b-c）で論じている。少し長い引用になるがすなわち、

涅槃云、若有<sup>レ</sup>人言、如来憐<sup>レ</sup>愍一切衆生、善知<sup>ニ</sup>時宜<sup>一</sup>說<sup>レ</sup>輕<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>重說<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>輕、觀<sup>ニ</sup>知我等弟子<sup>一</sup>。有<sup>レ</sup>人供給所須無<sup>レ</sup>乏如<sup>レ</sup>是之人、仏則不<sup>レ</sup>聽<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>畜<sup>ニ</sup>一切八不淨物<sup>一</sup>。若諸弟子、無人供須時世饑饉飲食難<sup>レ</sup>得、為<sup>レ</sup>欲<sup>ニ</sup>護<sup>ニ</sup>持<sup>ニ</sup>建立<sup>ニ</sup>正<sup>ニ</sup>法<sup>一</sup>、我聽<sup>ニ</sup>弟子受<sup>ニ</sup>畜<sup>ニ</sup>奴婢金銀車乘田宅穀米<sup>一</sup>。賣<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>所須<sup>一</sup>。雖<sup>ニ</sup>聽<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>畜<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>是等物、要須<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>施<sup>ニ</sup>篤信檀越<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>是四法所<sup>レ</sup>應<sup>ニ</sup>依止<sup>一</sup>。我為<sup>ニ</sup>肉眼諸衆生<sup>一</sup>說<sup>ニ</sup>是四依<sup>一</sup>、終不<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>慧眼者<sup>一</sup>說<sup>ニ</sup>。若有<sup>ニ</sup>三藏<sup>一</sup>反<sup>ニ</sup>上說<sup>一</sup>者亦不<sup>レ</sup>應<sup>ニ</sup>依<sup>一</sup>。又說<sup>ニ</sup>八不淨財<sup>一</sup>、十余處文皆極毀破不<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>畜服<sup>一</sup>。又云、若優婆塞知<sup>ニ</sup>此比丘破戒受<sup>ニ</sup>畜<sup>ニ</sup>八法<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>應<sup>ニ</sup>給施<sup>一</sup>。又不<sup>レ</sup>應<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>袈裟因緣<sup>一</sup>恭敬禮拜、若共<sup>ニ</sup>僧事<sup>一</sup>、死墮<sup>ニ</sup>地獄<sup>一</sup>。（大正四〇・七〇c）

というものである。この涅槃經の引文は、如来はあらゆる衆生を憐愍することから、衆生の時機を知って輕戒として説かれたものであつても場合によっては重罪とし、

重戒として説いても輕罪とすることがある。先の輕戒の戒体は遮戒のため性業ではないので輕であるけれども、しかし受蓄は過患が多いから重罪とする。また重戒の破戒でもそれは修道の資けとなる場合は輕罪とする。これらは如来の方便から出たものであるから、仏弟子の迷いの実相をよく觀知して八財の受蓄はゆるされなかったという。しかし例外として、必要なものの供給のない場合や、饑饉で飲食の得難い場合、正法を護持建立しようとする場合で、淨施を条件とするに限って、奴婢・金銀・車乘・田宅・穀米を受蓄したり、売易することもゆるすとする。これはあくまでも正法護持のため、また修道者の生命維持のための非常時のことであるとする<sup>⑩</sup>。そして邪正をわきまえることのできない肉眼の者（声聞乘）のためにこそ法の四依は説かれたのであり、慧眼者（菩薩乘）のためには説く必要がなかった。そしてもし法の四依に違反する三藏があれば依止すべきではなく、また涅槃經の十余處の所説はすべて受蓄をゆるさないものである。だから不淨財を受蓄する出家者に袈裟を着けているからといって恭敬禮拜する在家信者も、また受蓄者と僧伽の諸事を共にする出家者も双方とも死して地獄に墮することになるという。

これまでの引文がまた道宣の理解といつてよいが、次いで十輪經諸天女問四大品（大正十三・六八九b）と涅槃經を要約して、經律の証文の通結とする。すなわち

十輪經說、抛下不知持犯二者、並須恭敬。又涅槃經、窮終極教、不用亦得。以護法故小小非要。

（大正四〇・七〇c、七二a）

という。つまり蓄妻、挾子の出家者でも恭敬礼拝すべきであるなどという十輪經の説は、涅槃經の精神からはゆるされるものではない。十輪經は不了義經であるから、了義經に依止すれば不用であり、涅槃は護法の事であるから重く、十輪は俗信の存続を図るものであるから、この際は不要であるというのである。

以上が行事鈔の標宗顯德篇、隨戒相篇における八不淨財の論説であり、隨戒相篇では蓄錢宝戒の戒相についてこの後は結罪の輕重を論じ、交易罪の多少についての子細な検討にはいる。在家主義に立った菩薩戒といつても出家菩薩は具象面においては、貪著を離れることを基本とするから、財物の受蓄や犯した場合の出罪法、財物の処理の仕方は重要であり、これは道宣の現実的な關心としても高い事柄であったということがわかる。非家住・非定住・常乞食の出家生活が維持されておれば、出

家者の蓄財はそれ自体さけられるが、僧院化して定住化すると蓄財の問題は惹起して来るし、律令国家体制下において出家者の定住化が義務づけられた初唐の教界において注意を払わねばならなかったことであつた。そして大乘仏教といえども出家者は制戒を守り、大乘の心境で受持すべきであるというのである。八不淨財受蓄についても開遮は涅槃經によつて嚴格さが強調される。出家菩薩や比丘や僧伽は必要な財物は蓄えるべきではなく、貪著につながるものが厳しく戒しめられる。しかし事相について子細な判釈では涅槃經から具体的な影響は少なく、むしろ小戒を輕罪とする固定した戒觀を批判し、大胆に理の面から護持の重要性を主張するのに涅槃經が用いられている。そして、涅槃經は正法護持のための破戒（蓄財）に限り開許するが、これに対しても道宣は非常時の例外として受けとるが、時機に相応していく戒觀の弾力性を示したものとして受けとめるのである。

## 小 結

仏陀の本来の戒律の探求を意図した道宣にとつて、涅槃經の受用の特徴をたずねてみようとしてきたが、道宣は涅槃經によつて性や理の面での一仏乘戒の高い理念を

受用し、また衆生は護罪法を手だてとしつつ大乘の志を確立していくことを根拠づけるのである。小乗戒は事・修に偏執する欠点があるので、理・性の面で意義づけるために大乘涅槃經の戒律觀は受用されているといえる。

しかし、事・修の具体的な実践の方規は律藏が整備されていることも確かであるから、律藏に対して大乘思想の上からその形式化した固執を批判しつつ、新たに本来的根拠を与える涅槃經は、四分律を中心としつつも大乘の戒律を構築しようとした道宣にとっては、その構想の骨格のところで強く関わっていることが知られるのである。

このことは菩薩戒經といわれる梵網經や菩薩地持經や菩薩善戒經などの思想的影響がさほど顕著でないことや引用回数が少ないことから比較してみても、涅槃經の果たした役割の大きさが知られるのである。また戒律の事象面においても涅槃經によって八不淨物の受蓄が厳しく戒められる面が知られたが、これは淨肉として律藏ではゆるされる肉食が涅槃經などを根拠とした不食肉の思想に転化していくことと同じである。涅槃經は安易な律儀戒思想の形式主義に対して、自利利他、正法久住を旨とする菩薩思想の現実化として律藏を広い法の視点で重視する。この涅槃經仏性戒思想が道宣によって強く意識され受容

されたことがよく知られた。またこうした涅槃經と行事鈔の重層から導き出された戒律觀は後の中国仏教に限らず、東アジアの仏教に大きな影響を与えて、また新たな展開がなされるのである。

行事鈔における涅槃經の受容について更に明確にしようとするれば、他の引用箇所についての検討、他の經論の受容との比較、四分律宗の涅槃經受容の歴史、涅槃經の側から行事鈔をみることなど多くの課題を残すことになるが、後日を期したい。

#### 註記

- ① 安藤俊雄「北魏涅槃學の伝統と初期の四論師」(横超慧日編著『北魏仏教の研究』一九七〇・平楽寺書店所収一八七頁以下) 参照。
- ② 宮林昭彦「道宣の末法觀」(『大正新脩大藏經通信』第七四号所収)。
- ③ 川口高風「四分律行事鈔にあらわれた引用典籍の研究」(『曹洞宗研究員研究生・研究紀要』第六号) 参照。
- ④ 般若經系については、その実践觀は涅槃經に包摂されていると理解したからであると思われる。なお智度論は引用回数77である。また法華經については、平川彰「道宣の法華經觀」(坂本幸男編著『法華經の中国的展開』一九七五・平楽寺書店 所収三一九頁以下) 参照。そこでは、「道宣は律藏を重要視し、その教理的基礎づけに唯識の教理を

採用した。しかし、悉有仏性や自性清浄心の教理に立脚していたから、彼の思想には一乗経である法華経と合致する点があった。故に法華経を尊重していたが、しかし、特に法華経を他の經典よりも取りたてて重要視したとはいえない」と述べられる。

⑤ 土橋秀高著『戒律の研究』一九八〇・永田文昌堂 二一五・二二九頁以下参照。

⑥ 同右掲書 一九三頁以下参照。

⑦ 拙稿「道宣の出家学仏道観」(佐々木教悟編著『戒律思

想の研究』一九八一・平楽寺書店 所収三九六頁以下)参照。

⑧ 同右掲稿 三九六頁以下参照。

⑨ 境野黄洋著『国訳大藏経・附録・戒律研究上』一九二八・国民文庫刊行会刊、三二三頁参照。

⑩ 同右掲書 三九六頁以下参照。

⑪ 道端良秀著『唐代仏教史の研究』一九五七・法蔵館、三五七頁以下参照。